

学術シンポジウム1

ヒトはなぜ互いに会話するのか： 行動分析学からみたコミュニケーション

- ◆日 時：11月18日(金) 10:10～12:10
- ◆座 長：飛田伊都子 大阪医科薬科大学看護学部 教授
- ◆演 者：坂上 貴之 慶應義塾大学 名誉教授
- ◆指定発言者：岸村 厚志 学校法人河崎学園 大阪河崎リハビリテーション大学
リハビリテーション学部作業療法学専攻 教授
山田 利恵 三菱京都病院 看護師長
弘前 充嗣 千里リハビリテーション病院 副院長

学術シンポジウム1 略歴

座長

飛田 伊都子 (とびた いとこ)

大阪医科薬科大学看護学部 教授

略歴

学歴

1993年3月	山口大学医療技術短期大学部看護学科 卒業
1999年3月	The University of Newcastle, Australia, Faculty of Health, School of Nursing and Midwifery 編入学(同12月卒業)
2000年1月	The University of Sydney, Australia, Postgraduate Coursework Programs, Nursing and Midwifery 入学
2002年4月	同上修了 Master of Nursing(看護学修士)取得 「修士論文題名:Quality of life and provision of health care to patients with end-stage renal disease」
2006年4月	大阪大学大学院 医学系研究科 保健学専攻統合保健看護科学分野 看護実践開発講座(博士後期課程)入学
2009年3月	同上修了 博士(看護学)取得 「博士論文:慢性血液透析患者の運動習慣化を目指した支援に関する研究」

学位取得

1999年12月22日	修士(Master of Nursing) The University of Sydney
2009年3月24日	博士(看護学)(第22817号)大阪大学

職歴

1993年4月	京都大学医学部附属病院 看護師(平成9年3月まで)
1997年4月	北海道大学医学部附属病院 看護師(平成10年3月まで)
2001年2月	Royal North Shore Hospital Sydney Australia 看護師(平成13年7月まで)
2003年4月	鳥取大学医学部保健学科 文部教官助手(平成17年3月まで)
2005年4月	京都大学医学部保健学科 非常勤講師(平成20年3月まで)
2008年4月	京都大学医学部人間健康科学科看護学専攻 非常勤講師(平成23年3月まで)
2010年4月	スイス連邦工科大学組織・労働科学センター 客員研究員(平成24年3月まで)
2011年4月	滋慶医療科学大学院大学医療管理学研究科 准教授(平成30年3月まで)
2018年4月	滋慶医療科学大学院大学 医療管理学研究科 教授(令和3年3月まで)
2021年4月	滋慶医療科学大学院大学 医療管理学研究科 教授(大学名名称変更)(令和4年3月まで)
2021年4月	島根県立大学 客員教授(令和4年3月まで)
2022年4月	滋慶医療科学大学院大学 医療管理学研究科 特任教授(現在に至る)
2022年4月	大阪医科薬科大学 看護学部 教授(現在に至る)

賞罰

2001年5月	International Merit Scholarship 受賞 (The University of Sydney, Postgraduate Coursework Programs, Nursing and Midwifery)
---------	---

演 者

坂上 貴之 (さかがみ たかゆき)

慶應義塾大学 名誉教授

■ 略歴 ■

1984年 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。文学博士。
現在、慶應義塾大学名誉教授、日本心理学会理事長、日本心理学諸学会連合理事長 (6月まで)

主著

『意思決定と経済の心理学』 (朝倉書店 2009, 編著)

『心理学の実験倫理』 (勁草書房 2010, 共編著)

『行動分析学—行動の科学的理解をめざして』 (有斐閣 2018, 共著)

『心理学が描くリスクの世界—行動的意思決定入門 (第3版)』 (慶應義塾大学出版会 2018, 共編著)

訳書

J. E. メイザー著 『メイザーの学習と行動 日本語第3版』 (二瓶社 2008, 共訳)

『B. F. スキナー重要論文集 I~III』 (勁草書房 2019-21, 分担編訳)

B. F. スキナー著 『スキナーの徹底的行動主義—20の批判に答える』 (誠信書房 2022, 共訳)

指定発言者

岸村 厚志 (きしむら あつし)

学校法人河崎学園 大阪河崎リハビリテーション大学リハビリテーション学部
作業療法学専攻 教授

■ 略歴 ■

学歴

1984年3月	滋賀県立水口東高等学校普通科 卒業
1984年4月	京都産業大学経済学部経済学科 入学
1988年3月	京都産業大学経済学部経済学科 卒業 (経済学士)
1997年4月	藍野医療福祉専門学校作業療法学科 入学
2000年3月	藍野医療福祉専門学校作業療法学科 卒業
2000年4月	作業療法士免許(第23982号)
2013年4月	滋慶医療科学大学院大学医療安全管理学専攻 入学
2015年3月	滋慶医療科学大学院大学医療安全管理学専攻 修了(医療安全管理学修士)
2016年4月	大阪市立大学大学院文学研究科人間行動学専攻心理学専修後期博士課程 入学

職歴

1988年4月	株式会社ナリス化粧品(平成8年8月まで)
2000年4月	医療法人恒仁会近江温泉病院 作業療法士(平成15年3月まで)
2003年4月	医療法人恒仁会近江温泉病院 作業療法士 主任(平成17年3月まで)
2005年4月	大阪医療福祉専門学校 作業療法士学科 専任教員(平成24年3月まで)
2012年4月	大阪医療福祉専門学校 作業療法士学科 学科長(平成27年3月まで)
2015年4月	大阪医療福祉専門学校 教務副部長(学術担当)(平成28年3月まで)
2016年4月	大阪医療福祉専門学校 教務部長(学術担当)(令和4年3月まで)
2022年4月	大阪河崎リハビリテーション大学 リハビリテーション学部 作業療法学専攻 専攻長 教授(現在に至る)

山田 利恵 (やまだ りえ)

三菱京都病院 看護師長

■ 略歴 ■

最終学歴

2016年	滋慶医療科学大学院大学 医療管理学研究科 修士課程修了
-------	-----------------------------

職歴

1985年	三菱京都病院 看護主任
1995年	滋賀県堅田看護専門学校 専任教員
1996年	京都看護専門学校 専任教員
2004年	三菱京都病院 看護師長
現在に至る	

弘前 充嗣 (ひろさき あつし)

千里リハビリテーション病院 副院長

■ 略歴 ■

2001年	和歌山県立医科大学 卒業
2003年	国立循環器病研究センター 内科脳卒中部門 勤務
2008年	独立行政法人 国立病院機構 大阪医療センター 脳卒中内科 勤務
2019年	和風会 千里リハビリテーション病院 勤務
現在に至る	

日本脳卒中学会専門医
日本神経学会専門医
日本内科学会専門医

S1

ヒトはなぜ互いに会話するのか： 行動分析学からみたコミュニケーション

慶應義塾大学 名誉教授

坂上 貴之

第30回日本慢性期医療学会の大会テーマはCOMMUNICATION FIRSTである。そのテーマの発想の起点は、おそらく私たちの（医療場面を含む種々の）社会で進行しつつあるコミュニケーション不全への危機感にある。そして私たちは、それに加えて、2019年以降のCOVID-19がもたらした「新しい生活様式」の下で経験された、様々なレベルと形態での日常的な行動の変化と他者とのコミュニケーションの変質を目の当たりにしてきた。COVID-19の猛威が治まっていく中で、人々はせめて前と同じようなコミュニケーションに戻っていくのだろうか。それとも、リモート・コミュニケーションをはじめとするコミュニケーションをめぐる新たなパンドラの箱を開けてしまい、さらに不可逆な変質の道をたどっていくのだろうか。（注1）そして「新しい生活様式」の下での日常行動の今後の変化は、そうしたコミュニケーションの変質とどのように関わってくるのであろうか。

こうした問題を考える上で、ヒトの言語使用行動（Verbal Behavior, VB）がどのように生成され、維持され、減衰していくのかを分析することは極めて重要である。行動分析学は、生存随伴性、強化随伴性、文化随伴性という3つのレベルでの、生物個体と環境との動的な相互作用の理解を通じて、行動とそれが関わる諸問題を考えてきた。VBもまた、そうした行動分析学が対象としてきた行動の1つであり、自己報告、ルール生成、関係派生などのユニークな点を有するがゆえに、ヒトを特別な存在にしてきた行動である。

本シンポジウムでは、はじめに、心理学の中での行動分析学の位置づけから入り、心を仮定する他の心理学とは異なる、環境と行動についてのこの学の見方を紹介する。ひきつづいて、上で述べた随伴性という枠組みを進化の考え方から解説し、オペラントと弁別オペラントと呼ばれるVBを理解する上で重要な行動を論じる。そしてそこを起点とし、ヒトという種においてVBがいかに生成されてきたかを、私たち自身しか接近できない私的事象と社会・文化という環境との関係を絡めながら考察する。最後にVBがもたらしたコミュニケーションの維持や発展について、限られた時間の中で展開していきたいと考えている。

注1 <https://psych.or.jp/publication/world097/pw01/>